

## 会報

2021年7月号

東京アルコウ会



西天狗岳山頂よりの八ヶ岳連峰眺望

## ◆ 7月集会、委員会

期日： 7月25日（日）

Zoom会議に変更

委員会： 13:00～14:30

集会： 14:30～16:00

\*同日に予定していた安全登山のための講習会は延期

## ◆ 8月集会、委員会（予定）

期日： 8月29日（日）

委員会： 13:00～14:30

集会： 14:30～16:00

於： 赤城生涯学習館／教養室A

## &lt;山行計画&gt;

1. 8月7日（土）御岳山&御岳溪谷 L久住  
 集合場所・時間：JR青梅線「御嶽」駅前 8:50  
 コース：御嶽駅前バス9:08⇒9:39「滝本駅」  
 10:00ロープウェイ⇒10:20 御岳山駅→  
 御岳神社→ロックガーデン（昼食）→  
 御岳山駅⇒御嶽駅前→御岳溪谷→JR青梅線

「沢井」駅前（歩行時間4時間程）

交通：新宿7:21 JR中央線中央特快高尾行き→  
 （中野7:26→）7:47立川7:55 JR青梅線・奥多摩行  
 →8:45御嶽

2. 8月15日（日）奥多摩・奥多摩湖麦山の浮き橋から鞆口峠、都民の森へ L岡本

集合場所と時間：8月15日（日）9時20分までに奥多摩駅前集合（9時30分発丹波行きバスに乗りします、これに遅れると10時発）

コース=奥多摩駅⇒小河内神社バス停→（50分）→山のふるさと村ビジターセンター→（サイグチ沢コース1時間50分）→鞆口峠→（20分）→都民の森バス停⇒五日市駅

コースタイム=3時間+α

\*都民の森発3時50分のバスで五日市駅へ、5時半頃に五日市駅に着く予定をしています。

\*センターと峠間は、累積高度615mで約4キロ歩きます。沢沿いの歩きに期待しています。

\*詳細は追ってメールしますが、8日（日）までに岡本氏宛てに返事をください。

## 山行報告 山行回数 No.5723

○ 2021.7.10（土） 快晴

都電荒川線沿線散策 =係 久住=

参加者：瀧澤さん、田村（め）さん、松井さん、小國さん、久住さん、吉田さん、成田（合計7名）

昨年11月以来馴染みの顔にお会いするのは初めてで、久しぶりの再会を楽しみにしていました。コロナの影響でせいぜい近くを散歩する程度で、山行をためらう気持ちがありました。今回の企画は荒川線沿線を歩くといいこれだったら体力的に大丈夫。とそれに地方出身の私には東京の街はとて面白そうとの好奇心からすぐ参加を決めました。

案の定、とても面白かった。ただ私は誤解をしていました。

高田馬場駅で10時集合。皆さんすでに「都営まるごときっぷ」をお持ち。

あれ！今日は沿線丸ごと歩くのではないの？

またしてもわたしの不注意、久住さんからのメールをちゃんと読んでいなかったのです。

早速、高田馬場から甘泉園までバスで。ソーシャルディスタンスとか三密は遠い昔の話。4回目の緊急事態宣言が2日後に予定されているのに、、、。オリンピックも無観客開催に決まったのに、、、。と思いながらも、今日はどんな東京が見れるのかわくわくでした。

バス下車後、最初の訪問先は予定になかった「甘泉園」。園内は雄大な常緑樹に囲まれていて、梅雨の合間の晴天に暑い暑いを連発していた私たちには池もありホットする空間でした、園の名前は湧き水が甘露でお茶に適した所からついたそうです。



そこからすぐ近くに「肥後細川庭園」がありました。以前「駅からハイキング」というJRのイベントで訪れたことがありこの一带には椿山荘もありもう一度訪れたいと思っていたところでした。池泉回遊式庭園を散策し大正ロマンの溢れる「松聲閣」でティータイム。熊本のお菓子で日本庭園を鑑賞しながらのお抹茶。至福の時間でした。

予定外の訪問を終え、早稲田から荒川線電車の旅がスタート。鬼子母神前で下車。鬼子母神には安産、子育ての神様をお祀りしてあるだけあって若い家族ずれが見受けられました。見事に古びた駄菓子屋さん上川口屋さん（創業1781年）、樹齢約700年のイチョウの木も印象的でした。

そこから歩いて都電雑司ヶ谷駅へ。そして庚申塚駅下車。とげぬき地蔵尊で知られる高岩寺までの商店街で、揚げ物の定食が美味しいと評判の「ときわ食堂」で昼食をとりました。晴天で30度を越える暑

さの中で黙々と山盛りのニラレバ定食を頬張る私。皆さん美味しくそれぞれのメニューを完食しました。

お腹が満たされ賑やかな商店街を通り、「とげぬき地蔵」へ。健康とピンコロリンを願いお参りしました。さらに「洗い観音」を瀧澤さんに案内して頂きちょうど肩の辺りがずっとおかしいので観音様の肩に水をかけ回復を祈願しました。駅へ戻る途中帽子の忘れ物に気が付き慌てて戻ると観音様の前にあり、待ってくださっていたお仲間に「お参りしたご利益が早速あったね。」と言われ、私も「そうかもね。」と幸せに思いました。人間とは単純なものです。そんなこんなで俗称「おばあちゃんの原宿通り」を若手の松井さんを除くおじいちゃん、おばあちゃんと楽しみました。

次は大河ドラマで注目の渋沢栄一ゆかりの飛鳥山。亡くなるまでの約30年間住んでいた建物の見学はネットで予約を取っておかねば見学出来ないとのことでした。梅雨明けを思わせるような暑い日で、お茶をしましろうと資料館のカフェに着いたのは2時40分位。夕方予定がある私は残念ながらここで失礼しました。

飛鳥山から千代田線に連絡のつく町屋駅まで都電荒川線に乗り、所々線路の両側に楚々と咲くばらを眺めたり、昭和の香りが佇む下町の雰囲気を楽しみながらレトロな雰囲気の優しくチンチンとなる電車で帰路の途に就きました。誕生してから100年以上の歴史を持つ東京で唯一残った荒川線沿線には名所旧跡が沢山あり、とても魅力的な所でした。



終点の三ノ輪駅の商店街散策や荒川車庫を見学出来ず残念でしたが、とても楽しい街歩き、懐かしい路面電車の旅でした。東京アルコウ会という名前に相応しい登山やハイキングではない街歩きのイベントでした。

(記 成田)

山行報告 山行回数 No.5724

○ 2021.7.11 (日) 曇り、小雨

北高尾山稜山行 =係 岡本=

参加者：L岡本、小國

J R中央線高尾駅に集合。天気予報では雨とのことであつたが、厚い曇が時々日を遮るまらずの天気。駅前広場からバスに乗り、市街地を抜け、谷川に沿って上流へ進む。大下バス停で下車。川の下流に向かい、急な坂を下って行く。両側に高い山脈。南側の麓をJ R中央線が走り、特急電車などが轟音を響かせ通り過ぎて行く。その手前にはクルマミなどが茂る溪流があり、我々の歩く道路の北側には、段差の上にひとらびの人家があり、その奥には中央自動車道、そして山である。少し行くと溪流は右に曲がり高架橋の下を通り南に流れ、道路はT字路となる。メダカを飼っている家があり、ふ化したばかりの水の汚れのような小さなメダカが多数いる。我々は、道路を直進し、こんどは急な坂を登って行く。左に曲がり中央自動車道の下をくぐり抜ける。先ほどの溪流の支流を左に見ながら小下沢（こげさわ）林道を進む。周りは樹木がうっそうと茂り、散策している人もいる。マタタビを見つけたが、実は小さく青かった。林道の両側にはいたるところで、清流が滝となり苔むした岩を削っていた。

高尾の森作業小屋に到着。立派な建物と切り開かれた明るいひろばがあつた。うっそうとした林の中からサンサンと降り注ぐ日差しに出て、しばし休憩をとった。

道標の狐塚峠を目指し、ここからは急傾斜の山腹に造られたジグザクの登山道を登って行く。周りは間伐などの手入れの行き届いた杉林であり、下草が良く茂り、どれも立派に成長した杉である。登れども登れども苦しい登りは続き、休憩を随所に入れてゆっくりと登った。やがて頭上の木々の間が明るくなり、尾根に出た。尾根上の山道に、登ってきた山道がつながるT字路、北高尾山稜の狐塚峠である。

ここで昼食休憩をとった。ここは時折、重装備の登山者や軽装のトレイルランの人が通って行く。2人の元気な婦人に声をかけ東京アルコウ会の入会を誘った。

昼食休憩の後、北高尾山稜を道標の堂所山・明王峠・景信山方向、西へ関場峠方向に進む。杉林の中のピークに登頂したが、道標もなく山頂名もない。少し下り鞍部通り、また登る。今度のピークには道標が

あつたが、これも山頂名はなかつた。また下り、鞍部を通って登る。今度はきつい登りである。山頂名は杉の丸である。ちよくちよく差していた日差しはどこへやら、遠くで雷鳴が鳴り、小雨が降り始めた。リュックに防水シートをかけ、急な下りを降り、鞍部を通ってまた登る。この登りもきつい。今度の山頂名は黒ドッケ。雷鳴がなくなり、小雨も上がった。落雷も雨の本降りもなくラッキーである。ここから夕焼け小焼けふれあいの道である。尾根上の急な下りが延々続き尾根上のなだらかなところに行くと道標があり作業道に迷い込まないようにあつた。なだらかな尾根道を進むと再び登り、ピークに。ここも標識も山頂名もなかつた。尾根道から山腹を下るジグザク道に入る。ここからは自然林である。下の谷から子供たちの歓声が聞こえる。やがて夕焼け小焼けふれあいの里に出た。ここのバス停からバスに乗り高尾駅に出て解散とした。



(記 小國)

&lt;コースタイム&gt;

09:20高尾駅集合～小仏行きバス発09:32⇒09:45大下バス停着、大下バス停発10:05⇒小下沢（こげさわ）林道→10:55高尾の森作業員小屋着→登山道入口出発11:15→12:00狐塚峠（昼食）～12:35→北高尾山稜→13:15杉の丸→13:40黒ドッケ→（夕焼け小焼けふれあいの道）→15:15夕焼け小焼けふれあいの里、バス発15:32⇒16:00高尾駅着、解散

## 随想

アルプスの少女ハイジ

山に憧れ、山に行き、我が道を歩む

(記 高橋 (好))

半世紀程前、当時、日本にも夏にも雪のとける所のない雪渓があることを知った。憧れてしまった。

三大雪渓の一つ白馬大雪渓の上の白馬山荘で山小屋のアルバイトにとびついた。猿倉から取り付く雪渓の大きさに心躍り上がり登る。かなりな登攀が続いたがお花畑にでて高山植物の花々を見たら、こんな素晴らしい所があるのだ。感激！！小雪渓を上がるともう山頂に近い。（後年、はるか昔に娘を連れて登った時は、小雪渓は消えてしまうのではないかと思う程小さくなってた）ただやたらと音量一杯に音楽が流れてくる。耳ざわりだし、興ざめ。後に小屋の主人に聞いたら、濃霧で方向を失わないように流しているとの事。事故が多いのだ。



(白馬山荘ホームページより)

山の朝はやたらと早い。消灯が8時とは言え、2時か3時起床。早出客用に弁当（おにぎり）を作らなければならない。熱いごはんを握るのがこんなに大変とは知らなかった。手を冷やしながら握っても手の皮は厚くない。すぐに熱で痛くなる。客の出発を見送ってしばらくして仕事が一段落。休憩となる。始めのうちは、唐松へ続く尾根道を眺めたり、黒部の溪谷を眺めたり楽しめたが各地の大学山岳部の強者がバイトに入っていて、そこまで行ってこようと誘ってくれる。でも私の身体はそんな山行きをしていたら身体がもたない。多分すごく持てたんだと思う。けれど私の心には届いていなかった。ひたすら布団部屋へ入って湿った布団に涙を流し更に布団を湿らせて眠りこけていた。

主人が見かねてか私には帳場で宿泊者の名簿作りや売店の店番の仕事をまかせてくれた。地元の女子高生生のバイトに軽蔑の目を向けられ、口も聞いてもらえず、悔しくて唇をかむ。日が沈み夜の闇のが訪れると、当時、黒4ダムの工事現場の灯がポツンと溪谷の暗闇の中に輝く。その灯の中に東京の灯を思い、懐かしさ、恋しさに胸がはりさけそうになった。

短い期間だったが、主人から帰りなど言われた時はうれしさと飛び上がりそうになった。帰る日の天

気は朝から土砂降り、下の川で女の子が流されたとの情報が入ってきて、主人は不安そうだったが私の心はもう東京に飛んでいる。今さら下りるなど言われても、身も心もそんな事受け入れられない。あの大溪谷を雨の中下りてきた。やたらと寒かった。よく下りてきたと後で感心する。

汽車が新宿に近ずき見慣れた夜の新宿の夜景を目にして帰ってきたこの嬉しさ。ハイジになれなかった悔しさはどこかへ行ってしまった。

## 随想

### 山に親しみ山に想う (38)

#### —新型コロナ禍と山行自粛—

(記 岡本)

昨年(令和2年)は11月に高尾山を歩いたのが最後である。今年に入っては6月現在高水三山の惣岳山を物しただけである。半年間に低山一峯(座)では、長い間定期的に山行を楽しんできた者にとっては、体の生理的面や生活のリズムに変調をもたらす虞れがある。しかしながら、新型コロナ蔓延下では自他の安全、安心を守るために山行自粛も考え方によっては已むを得ないであろう。

嘗ては毎週の如く、その後はほぼ20日程の頻度で山を歩いていた。山歩きそのものが生活の中心を占め、元気の源泉ようになっていた。その元気を山だけでなく別の分野にも注いで生活は充実していた。それが山行自粛で元気が削がれてしまい、ノンベンダラリ、便便と過ごすような無様に陥り始めた。そこで山行自粛の埋め合わせとして二つのことを生活に取り入れて打開を試みた。山の古書読書と山の地図を眺めることである。

古本屋で探し求めて読んだ幾冊かの古書の中で、田部重治の著書を読み、「読書尚友」といえば語弊があるが、その著者の人柄と登山考に魅せられてお近づきになれたことを喜んでいる。田部は「日本の自然美とは何か」の小文(「青葉の旅、落ち葉の旅」田部重治著、第一書房、昭和16年5月刊行)の中で要旨このように述べている。

【自然美をスイス人に問えば「アルプスと湖水」と答えるように、イギリス人に同じように問えば「牧場」と答えよう。では日本の自然美とは。日本の特殊風土からみて、山や溪流や高原や平野は外国のそれらとは異なる日本独特の美しさを持つのは勿論

だ。その中で特に溪流を考えるとなしに山を考えるとできない。逆もそうだ。溪流は無数の美をもつ。多くの滝の美と奔流の美と森林の美と岩の美と流れそれ自身の清澄美をもつ。ここに山と溪流とが包容する比較的大きな一つの個性を持つ渾然とした溪谷美こそ日本の自然美であり国民的景観である。】

この小文を読み、日本の自然美について自分なりに考えながらも胸中にモヤモヤとしていたものが一挙に解消したのである。田部の視点と結論に敬服した。

自分が歩く低山にも溪流がある。流れが白い泡沫を飛ばして岩に激し、滝を落下して壺に水を湛えているのを見ることができる。規模を抜きにすれば、たぎる奔流や瀨もある。小さな溪流だけにその水源も見つけ易い。

眺めた地図は、昭文社「山と高原地図」の奥多摩、丹沢、奥武蔵・秩父、高尾・陣馬の東京近郊地図である。これらの地図には、2008年に高尾山より始めた山歩きの足跡を全てボールペン赤でなぞっている。特に高尾、奥多摩の地図上には、網の目のように縦横に赤が引かれている。なぞった赤線は、地図の赤実線(登山コース)だけでなく、赤点線(登山コース難路)や薄い灰色点線(登山道でない小道)に及んでいる。

机上に地図を広げると、心がふわりと飛翔し赤線をなぞって鳥瞰する。そして心は山歩きを始め、回想する。秀峰富士山の望見、樺の幽林、針葉樹から落葉樹に抜けでた際の明暗、小さな溪流の水源発見、草花・鳥・虫に出会った瞬間、他の登山者との予期せぬ出会いなどなど、思い出される。それらは鮮明なものだったり、どの山道でのことだったか曖昧なものまで多様であり、心は回想の中で浮遊する。そして実際の山行ではないが、夢幻のような山歩きを楽しむことによって山歩きできずに溜まったストレスを発散させることができた。

網の目のように引いた赤線の地図にも、線の途切れた空白の部分があちこちにある。その空白は一本の尾根であったり、短い落ちこぼれの区間であったりする。続けてきた低山歩きの中で、自ずとできた原則のようなものがある。それは日帰り、最寄りのバス停から登山口まで必ず歩く(タクシーなど使わない)、出来るだけ初めてのルートを選択する、の三箇条である。日帰り原則に反したのは雲取山と両神山である。高尾山から歩き始めた当初は、どこを歩

こうが初のルートであったが、数年先からそうはいかず、効率よく空白を埋めるルートを選ぶのに思案するようになった。東京アルコウ会に入会した頃には相当赤線が増えていたので、会の山行の係として山行ルートを決める際にジレンマに陥ることが生じた。自分としては未だ歩いていない空白部分を歩きたいがため、マイナーコースやバリエーションコースを係として案内しがちになるが、果たしてそれが適当なのか困惑する場合が増えた。同行者の中には、変わったコースだと思われた方がおられると思う(この点について2020年9月号会報のコラム「どこの山が好き?」を御参照下さい)。また、歩いてないところばかりを選んで歩くのは、ある種邪道だとの見方もあるが、未知のルートには未知の何かがあるかも知れないと想像させてくれるだけでも歩くに値する。

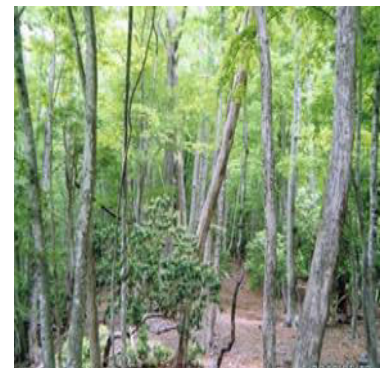
(了)



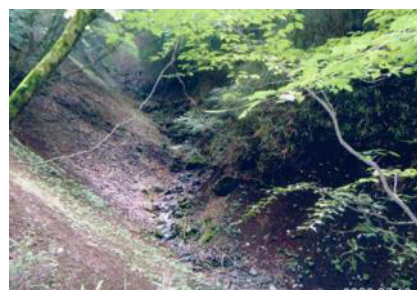
河口湖側から見た富士山



西沢溪谷の七ツ釜五段の滝



蕎麦粒山のぶな林



丹沢・高指山源流の水源辺り